

共軌回転弾

——金博士シリーズ・11——

海野十三

青空文庫

チャーチルが、その特使の出発に際して念を押していった。

「ええかね。なるたけ凄いやつを買取るんじや。世界一のやつでなけりやいかんぞ」

そしてそっぽを向いて（これからは、何でも世界一主義で行って一釜起すんだ）と呟いた。

ルーズベルトが、その特使の出発に際して竹法螺声で命をふくめた。

「あの手におえないダブル・Vイの三号に、博士を附けて買ってしまえ。第一手段に失敗したら第二手段、第二手段に失敗したら第三手段……。第十手段まで行くうちには、必ず成功するように検算はしてあるからねえ」

二人のいうことも、この節では前とは大分違つて来た。

そこで特使と特使が、中国大陸の〇〇でぽったり行き逢つたわけだが、初めのうちほどつちもそれと気がつかない。それというのがチャーチルの特使は、不潔なモルフィネ中毒

患者を装^{よそお}つて、よろよろ歩いていたし、一方ルーズベルトの特使の方は、男使^{だんし}と女使^{じよし}の二人組で街^{がい}頭^{とう}一品料理は如何でございと屋台^{やたい}を引張つて触れて歩いていたのである。

チャーチルの特使チーア卿^{きやう}は機甲中佐^{きこうちゆうさ}であった。ルーズベルトの女特使^{おんなとくし}ルス嬢は、この間まで南太平洋の輸送機隊長をしていた航空大佐であり、その相棒たる男特使^{おとことくし}ベラントはリード商会の若番頭の一人で、ちやきちやきの手腕^{うでた}を謳^{うた}われている人物だった。

「よう。料理は何が出来るのかね」

チーア卿は、ろれつの廻らない舌で、ベラントとルス嬢の屋台に呼びかけた。

「お好みの料理を作りますぜ。殊に燻^{くんせい}製料理にかけては、世界一でさあ」

ベラントはぬかりなく宣伝にかかる。

「世界一かね。じゃあ、それを作って貰おうか。早いところ頼むぜ。それからウイスキーにミルクだ。コーヒーはジャワのを。シエリー酒も出してくれ。いや心配するな、金ももっているぜ」

チーア卿は、ポケットから、何枚かの法幣^{ほうへい}をつかみだして、皺^{しわ}をのばす。

「へいへい。有^{ありがと}難うございます。おっしゃったものは皆そろって居ります」

「へえ、皆そろって居るって、本当かね」

「嘘じやありません。まあ、ごゆつくり召上つて頂きましょう」

うすきたない屋台から、途方もない絶品佳肴ぜつぴんかこうがとりだされたのには、チーア卿も目を
ばちくりであつた。

「燻製も、一番うまいのはカンガルーの燻製ですな。第二番が壁州べきしゅうの鼠の子ねずみの燻製。
三番目が、大きな声ではいえませんが、プリンス・オヴ・ウエールス号から流れ出した英
国士官の〇〇の燻製……皆ここに並べてございませう」

「ええつ、何という……」

チーア卿は顔をしかめた。

「旦那。おどろくのは後にして、一番から順番に召上つてごらんになすつたら。おいしく
なかつたら、燻製屋の看板は叩き割られても文句を申しませぬわよ」

と、ルス嬢も口を出す。

「いや、わしは……おれは、一番と二番とで沢山だ。ううい、いい酒だ」

チーア卿は酒に酔つたふりをして、その場のおどろきを胡魔化ごまかす。

「勘定かんじょうをしてくれ。いくらだい」

チーア卿は、几帳面きちょうめんに精算をし、小銭こぜにの釣銭までちゃんと取つて、街を向うへふらふ

らと歩いていった。

「うまく行つたわね。これである人は、うちの名代燻製料理を吹聴してくれるわね」と、ルス嬢は涼しい顔。

「とんでもない。彼奴は油断のならない喰わせ者だよ」

「へえ、喰わせ者」

「そうよ。器用な早業で、カンガルーの股燻製を一挺、上衣の下へ隠しやがった。あいつは掏摸か、さもなければ手品師だ」

「まあ、そんな早業をやつたのかね、あの半病人のふらふら先生が……」

「まあいい。それよりは商売だ。金博士の耳に一刻も早く届くように、世界一の燻製料理の宣伝にかかることだ。さあいらつしやい。世界一屋の燻製料理。種類の多いこと世界一。味のよいこと世界一。しかも値段のやすいこと世界一。さあいらつしやい。早くいらつしやつてお駈しなさい」

気の軽い碧眼夫婦の呼び声に、この陋巷のあちこちから腹の減つた連中が駆けよつて来た。屋台の前は、たちまち栄養不良患者の展覧会のようになった。

燻製料理世界一屋の商売は大繁昌だ。

しかしベラントの顔にもルス嬢の顔にも、一抹の不満の色が低迷している。

「だめじゃないか」

「どうしたんでしようね、あの人は……」

あの人は……。あの人とは二人の期待している人物が現れないことである。あの人は世界一の燻製好きだ。そして世界一の科学兵器発明家だ。その名前を金博士という。その人こそ二人が、いやチーア卿も亦^{また}、はるばるこの地へやって来て、何とか取り纏^{すが}ろうという目的の大人物だった。金博士は、この陋巷のどこかに住んでいる筈だった。

2

「ふむ、ふむ、ふむ」

生返事をするばかりで、すこしもはつきりしたことを言わない金博士だった。それも道理、今、博士は燻製のカンガルーを喰べることに夢中になっている。

「……そういうわけでしてのう。お礼の点については、はばか憚りながら世界一の巨額をお払いしますじや。チャーチルも申しとりましたが都合によつては、カンガルーの産地オーストラリア全土を博士に捧ささげてもよいと申し居りますぞ。どうぞその代り、博士が今お手持ちの発明兵器で、世界一なるものを余にお譲りねがいたい。そこに大英帝国の最後の機会がぶら下さがつて居るといふわけでしてな、どうぞ御同情を賜たまわりたい。いかがですな、目下お手持の発明兵器で世界一と思おぼしめ召すものは……」

「ふむ、ふむ、ふむ」

博士は、猫が魚のあらと取組んでいるように只呻たがるばかりである。カンガルーの燻製が、悉ことごとく博士の胃袋に収おさまるまでは、まず何にも言わないつもりらしい。

こんなわけで、早いところ餌をもつて押掛けたチーア卿の早業はやわざは、街頭を血眼ちまなこになつて金博士の姿を探し求めてゐるルーズベルトの男女特使を、今も尚失望なさせてゐる。

「まだ現れんね」

「どうしたんでしようか。居ないわけはないんですけれどね」

地下二百尺の金博士の部屋では、今や博士は大きな逆しやくり吃くをたて始めた。

「ひつく。ひつく。ああ、うまかつた。久しぶりじゃつたからう。ひつく、ひつく、ひつく。ど

りやすこし睡るとしよう」

遠慮を知らぬ金博士のことであるから、あわてるチーア卿を相手にせず、ごろりと横になると、早ぐうぐうと大駟おおいびき。
 なる。

「もしも博士、喰い逃げとは、そりやひどい……」

と、卿は立上つて博士をゆすぶり起そうとしたが、待てしばし。ここで無理に起して、臍へそまがりの博士に又えらく臍をまげられては特使の目的を達することは出来ない、苦しい我慢を張る。したがチーア卿とて只の鼠ではない。幸いあたりに睡る博士の外ほかに人はなし、秘密の研究室は自分の外ひとめに人眼ひとめというものがない。この機会じょうに乗じて、金博士の最近の発明兵器を調べておいてやろうと、たちまちチーア卿は先祖から継承の海賊眼かいぞくまなこを炯ら々らんと輝かし、そこらをごそごそやりだしたことである。

おどろいたことに、部屋の扉はみんな鍵がかかかっていない。だからどの部屋へも入れた。金博士の実験室は、あまりにも雑然としていて、どれが研究の主体だか分らない。すばらしい毒瓦斯ガス製造装置だと思つて、たかの知れたキップの水素瓦斯発生装置を持つて帰つて笑われても詰つまらないと思つたチーア卿は、実験室には手をつけないうちにして、更に次の部屋へ。

次の部屋は模型室だった。四方の壁に棚が吊ってあって、その上に博士の発明になる新兵器の模型の数々が、まるで玩具屋の店頭よろしくの光景を呈して並んでいた。それを一つ一つ見ていく卿は、溜息のつきどおしだ。それというのがどれもこれも垂涎三千丈の価値あるものばかり。三段式の上陸用舟艇あり、超ロケット爆弾あり、潜水飛行艇あり、地底戦車あり、珊瑚礁架橋機あり、都市防衛電気網あり、組立式戦車要塞あり、輸送潜水艦列車ありというわけで、どれもこれも買って行きたいものばかりで目うつりして決めかねる。さてこそ出るは溜息ばかりで、卿の心臓はごとごとと鳴って刻々変調を来たす。

「困ったなあ。この中で一体どれが世界一であろうか」

それは分りかねる。分りかねるならば、択んで行く途なし。さらばやはりみんな買って行こうとすると、これだけ嵩ばったものを到底持ち出しかねる。

「困った。どうすればいいのか」

卿は、顔一面にふき出た脂汗を拭うことも忘れて、いらいらと部屋中を歩きまわる。結局決つたのは、もつと別の部屋を探してみようということだった。

そのチーア卿が、五番目の部屋に侵入したときに、漸く満足すべき結果に達した。

「ああ、これだ、これだ」

卿の駈けよつたのは、部屋の壁全部を占領している大金庫であった。この中にこそ、金博士の重要書類がぎつしり入っているに違いない。

幸いにして金庫破りにかけてはチーア卿は非凡なる技倆を持っている。彼はこの方では英国に於ける第一人者といつて差支えないほどの研究者である。その大金庫は、僅々きんきん十一分のうちに見事にぎいつと開かれた。

ところが、この金庫の中に、卿をひどく当惑させるものが待つていた。というのは、予想どおり設計書が一件ごと別々の袋に入つたものが、三百何十種収められて居り、その袋の表面を見ると、「世界一の発明。引力相殺装置」とか「世界一の発明、宇宙線を原動力うりよくとせる殲滅戦兵器」とかいつた具合に、どれを見ても、名称の上に「世界一」を附してあることだつた。これではチャーチルの命令に應じて、最も勝れたる世界一の発明兵器として、どれを択んで持ち帰りなばよろしきや、さつぱり分らない。チーア卿たる者、宝の山に入りながら、あまりに夥おびただしき宝に酔つて急性神経衰弱症に陥つたきらいがないでもない。

こうなると人間はいやでも単純に帰らざるを得ない。つまり、何でもよいから、持てる

だけ持つて帰ろうということだ。チーア卿は両手に抱えられるだけの設計書袋の束を二つ拵えて、それをうんこらさと抱えあげると後をも見ずに金博士の部屋からおさらばを告げたのであった。盗み出した設計書の件数、しめて五十三件、さりとは慾のないことではある。

3

チャーチルの泥棒特使が仕事を終つて去つたが、ルーズベルトの特使二人の方は、いつでもまごまごしていた。

が、彼らにもようやくチャンスは巡り来り今や彼等は駿馬の尻尾の一条を掴んだような状況にあつた。というのは、たまたま燻製屋台へ買いに来た金博士の若いお手伝いの鉛華をルス嬢が勘のいいところで発見、そこへバラントが特技を注ぎ込んで、たちまち鉛華をおのれたちの葉籠中のも物としてしまったからである。

「旦那さまぐらい燻製ものに理解がおありになり、そして燻製ものをお好みになる方は世界に只お一人でございますわよ」

と、鉛華も遂に本当のことをぶちまける。いよいよチャンスは来たぞと、燻製屋に化けこんで苦勞のかぎりを今日まで尽していたルスとベラントは、うれしさが腹の底からこみあげてくるのを一生懸命に押し戻し、

「まあ、そういう頼母しい御方さまに巡り会いますなんて、神様のお引合わせですわ」

「そうだとも。それに……ちよつとこつちへ来てください、美しい鉛華さん」

「あら、お口がお上手なのね。警戒しますわ」

「いやなに、ざつくばらんの話ですが、貴女が金博士にわれわれをとりもつて下されば、

博士の貴女に対する信頼は五倍も十倍も増しますよ。俸給も上るでしょうし、うまい

ものも喰べられる。そればかりじゃない、われわれも儲けの一部を貴女に配当します。もちろんこれは断じて闇取引じゃない、正当なる利得ですし、それにねえ鉛華さん……」

と、ベラントは此所を先途と商才のありつたけをぶちまけて、遂に鉛華を完全に手に入れてしまったのである。

そうになると、一刻も早く本当の商売に突入しなければならぬ。ルスは各種の燻製料理

をぎつしり詰めこんだ食品容器をさげベラントに目配せめくばをする。そこで三人は打連れうちつれだつて金博士の住む地下室へと下りていった。

金博士は、睡眠から覚めて、部屋の中をよぼよぼと歩きまわっていた。

骸骨がいこつのように大きい頭、黒い眼鏡、特徴のある口髭くちひげ、頬鬚ほおひげ、頤鬚あごひげ、黒い中国服に包んだ瘦せた体——一体この体のどこからあのようなすばらしい着想とおそるべき精力とが出て来るのであろう。

「ふふふん、ふふふん、ふふふん」

金博士は、妙な咳せき払いほらをつづけさまにして、部屋の中を動きまわっている。失意か、得意か、さっぱり分らない。チーア卿が開け放しにしていった大金庫の前を幾度か行き過ぎるが、その方には見向きもしない。

そこへ鉛華が入って来た。

「先生、町に素敵な燻製料理を売っていましたので、買って参りました」

「燻製か。燻製はもうたくさんじゃ」

「あらつ、先生のお好きな燻製でございますよ」

鉛華は博士の答に、意外な面持。うしろではルスとベラントが心配そうな顔を見合わせ

る。

「燻製はもうたくさんじやというのに。きつき、いやというほどカンガルーの燻製を喰ったよ。腹一杯になった」

「まあ、どうして召上ったのですか」

「泥棒がここへ持つて来て、わしに喰えといった」

「泥棒が……」

「そうだよ。チャーア卿といってな、チャーチル奴めの特使じやよ。モヒ中毒を装った苦にが苦にがしい男じや」

「それが泥棒でございますか」

「大泥棒じや。あれを見よ。わしの大金庫から新兵器の設計書袋を二抱かかえも持つて逃げよつた。怪しからん奴じや」

「まあ、それで先生は、その泥棒をお捕えにはなりませんでしたの」

驚おどろきは鉛華よりも、後に控えたルーズベルトの特使ルス嬢とベラントの胸うちの中だった。折角せつかく来たが、チャーチルの特使に一足お先へやられてしまったとあつては、甚ますだ拙ちい。

「あの泥棒は逃がしてやった。それにわしはすっかり腹はらがくちくなくなつて、指一本動かすの

も大儀たいぎじやったからなあ」

「まあ、いつもの先生なら、決してお逃がしになるのではありませんでしたのに……」

ルス嬢はこのときそつと鉛華の袖を引いた。それで鉛華はわれに帰って、金博士に燻製をすすめる役を引受けたことを思出したが、こうなつてはどうにもすすめようがない。その困り切つた顔を見て取つたベラント、すかさず前にとび出し、博士に倚より添そつて聞き始める。

「金博士。私達は、燻製料理を持つて伺いましたが、実はルーズベルトの特使でございまして……」

と、臆おくせず底をぶちまけるアメリカ流に、博士は驚くかと思いの外ほか、

「分つとるよ。ベラントにルス嬢じやろう。わしの発明兵器を、わしごと買い取りに来たのじやろう」

と、ずばり凶星ずほしをさした。ベラントの愕おどろき、

「ええつ……」

といったまま、あとが続かない。

こういうときに婦人は度胸どきょうのある者、ベラントがノック・アウトされたと見て、前に

とびだして博士の腕を抑える。

「今お呼び下すつたルス嬢でございます。仰有つたとおりのわけですから、ぜひ契約して頂きとうございます。その代り博士のお望みは何なりと……それに特別精製のアメリカ名産バイソンの燻製を一口召上つて下さいまし。これこそ世界最高の珍味でございます」

金博士をくどくには、いつの時代にあつても燻製料理によるのが捷徑だという鉄則を、ルス嬢もはずさない。はずさないばかりか、ルス嬢は躊躇の色もなく、博士の前に燻製バイソンなどを詰めあわせた食料容器の蓋をぽかんと払つたものである。

4

やつぱり効目があつた。燻製料理は、金博士にとって、恰もジグフリードの頸に貼ついた椎の葉の跡のようなものであつた。それが巨人に只一つの弱点だつた。博士は今や羊のように温和しくなつて、前にルス嬢とベラント氏を座らせている。尤も博士自身は、

両人提供のバイソンの燻製を大皿にうつして、盛んにぱくついている有様だった。

人見知りをしないで、核心にとびこんでいく心臓人種のアメリカー人のことなれば、嬢も氏も、こうなつては燻製屋の仮面をさらりとかなぐり捨て、ルーズベルトの特使でござると名乗りあげて、金博士の前に陣を構えているわけである。事は早くなければならない。

「博士。飛切り上等の物凄い新兵器として何を提供して頂けませうか」

「うむ。むにやむにや……」

「それを使えば、敵側は全く処置なしという凄（すじ）いものを御提供願いたい。そのお礼の一つとして、博士をアラスカへ御案内したいですな。エスキモーの燻製など、天下の珍味（ちんみ）でございますよ」

「わしは人間は喰わぬ」

と、人を喰つた博士が、コップから水をごくりと飲んでいった。

「今のはベラントの失言（しつげん）でございます。博士、世界をたちまち嚮伏（しょうふく）させる新兵器といたしましては、どんなものを御在庫（ございこ）になつていましませうか」

「分っているよ。では案内しよう」

博士は、今日は珍らしく事（こと）の外御機嫌斜（なな）めならず、両特使を引連れて、研究室へ導く。

「ここにあるのが、訪問者の身許透視器だ」

と、博士は壁に嵌めこんである複雑な弱電装置を指し「入口の扉に近づくと、この人体周波分析器が働いて、その人物のあらゆる特徴と思想を分解し、こつちの自記録紙の上にプリントするのだ。ほら、これが例のチーア卿の分だ。あとの二つが君達兩人の分だ」と、自動ピアノの鑽孔布のようなものを引張り出して示す。ルスとベラントは、どつと冷汗をかく。

次の部屋は模型室だ。そこへ一步を踏み入れた両特使は、棚にぎつちりと並んだ夥しい兵器模型にたちまち魂を奪われた。

「これは何でしようか」

「これは何ですの」

「ああ、それは陳腐なものばかりじゃ。今列国の兵器研究所が、秘密に取上げているものばかりだよ。今頃そんなものに手をつけては手遅れじゃ。こつちへ来なさい」

博士は興味のない顔で次の室へ。

「この大金庫の中には、世界一を呼称する新兵器の設計書袋が五百五十種入って居る」
「ほう、五百五十種もですか」

「そうじゃ。さつき泥的チーア卿が、この中の五十三種を攫さらってしまってしまつたよ」

「ええ、チーア卿が……あの、五十三種も……。それはたいへんだ」

「なあに、愕おどろくには当らんよ。もうあと三十分もすれば、チーア卿は後悔するだろう」

「と申しますと……」

「あの五十三種の書類はあと約三十分すれば、自然発火するんじゃ」

「自然発火？」

「そうじゃ。この書類は一定の温度と湿度と気圧のところところに在る限り安全じゃ。つまりこの部屋はその適切なる恒久状態においてある。恒温湿圧室こうおんしつあつしつなのじゃ。したが、一旦他へ搬うつばれ温度と湿度と気圧が違つてくると、一定時間の後には用紙が変質して自然発火するのじゃ。チーア卿は、さつきの装置で調べると、今飛行機にあれを積んでインド方面へ向けて飛行中だが、見ていなさい、あと三十分で飛行機は空中火災を起して墜落じゃ。泥棒にはいい懲こらしめじゃよ」

「へえん、それはそれは……」

ベラントとルスとは、目を三角にして、互いに顔を見合わせた。

「わしは元来淡泊じゃ。君たちの要求をもう一度改めて聞いて、すぐそれに適かなつたものを

売ってあげよう。希望をいつてみなさい」

「はあ、それは有難うございます。博士、アメリカの欲しいものは、世界一の物凄い破壊新兵器で、これを防ぐに方法なしというものを頂きとうございますの」

「そうなんです。戦艦いえどと雖も飛行機には弱く飛行機と雖もロケーターには弱く、ロケーターと雖も逆ロケーター式ロケット爆弾には弱い、金博士と雖も燻製料理には……いや、これは失礼……というわけですが、ルーズベルトのお願いしたいと申す新兵器は絶対に弱味のない不死身ふじみの手のつけられないハリケーンの如き凄い奴を、どうぞ御提供願います」

「そうか。そういうことなら 共転回きようやくかいてんだん転弾が条件にぴったり合っている」

「えっ、共転回転弾。ああ、なんとというすばらしい名称でしょう。大統領はどんなにおよろこびになることでしょうか」

「ええと、あれは第五十四号だったな」

と、博士は大金庫の中から設計書類の一つを引張りだした。袋の口から中を覗いていたが、するりと抜きだした折畳んだ大きな紙。それを机の上に拡げる。

「あら、白紙しろかみだわ」

ルスが愕いた。

博士は無頓着に、その大きな紙の四隅をピンでとめた。それから机の下をさぐっていが押し釘ボタンの一つをぶつんと押した。すると紙がぱつと蛍光色けいこうしよくを呈して光りだした。空白の紙上にはありありと凶面が浮び上る。

「共軛回転弾というのは、こういう具合ぐあいに、二つの硬い球かたが、丁度鎖の環ちようどくさりわのように互いに九十度に結合して、猛烈な高速で回転するのだ。そして互いに相手を励磁れいじして回転を促進し、永久に停まらない。この硬い球は、原子核の頗るすこぶ大きいものだと思えばよろしい、わしが五年かかって特製したものだ。硬いこと重いことに於て正に世界一。そしてこれを共軛回転させてスピード・アップすると、その速力は音波の速力の約三十倍となる。そこへ持つて来て、これは一名『鉄の呪い』という名があるくらいで、鉄材を追駆けて走りまわるのじゃ。じやによつて、いかなる戦車群、いかなる大艦群だいかんぐん、いかなる武装軍も、たちまちこの回転弾のために粉碎されてしまうというわけだ。この共軛回転弾によつて破壊し得ないものは、この地上に一つもない。どうじゃ、聞いているのか」

「ええ、聞いていますとも、まあなんとというすばらしい新兵器でしょう」

「ああ、一千億ドルの値打があるよ。現物げんぶつはこつちにある。来てみなさい」

金博士は悠揚ゆうよう迫せまらず、更に奥の部屋に案内する。そこは倉庫のようなところだった。

博士の立停つて指すところに、一つの木箱きはこしがあつた。箱の大きさは二米立方メートル。

「これじゃ。この中に入つとる」

「まあ、危くありませんの」

「いや、まだ起動きどうして居らぬから危くない。この棒を抜くと、まず一部分に静かなる化学変化が起り始める。その化学変化がだんだん発達して、小さな歯車が動きだす。電気が起る。小さいモーターが廻る。だんだんと大きな牽引けんいん力が起り、電力が発生し、やがて二つの硬球こうきゅうが双方から寄つて来て、ぐるぐると回転をはじめ。するとこの箱がめりめりと壊れる。中から回転弾が、ぼうんと飛び出す。あとはめりめりもりもりと破壊が始まる」

「すげえもんだなあ」

「目的地にこの箱がつく時刻が分つて居れば、この時限管じげんかんの適當なるものを壊しておいてから起動棒を抜くと、ちゃんと所定の時刻に回転を始める仕掛になつて居る。目的地へこの箱のつくのは何時間後じゃな」

博士は二人の特使の方をふりかえつた。

「はい。目的地へつくのは、これから輸送機を呼んで、一時間後には当地を出発できます」

から、あとワシントンまで六千九百九十九キロを平均時速八百キロで飛んで、八時間と四十五分。飛行場から直ちに白堊館はくあかんまで自動車で搬はこんで大統領に謁見するとしてその時間が十五分。合計丁度ちやうど十時間。十時間です。博士」

「十時間、ああよろしい。正確に十時間後と調整して置こう」

5

ルーズベルトの両特使は、鬼の首をとった以上の悦よろこび方で、直ちに電報をうって、「共軌回転弾を持ちて帰国する」旨むねを大統領に報しらせるやら、輸送機を呼びよせるやら、俄にわかに中国大陸土産みやげを掻かき集めるやらで、こま鼠ねずみのようにきりきり舞いをしていたが、それでも一時間後には、ちゃんと輸送機上の人となっていた。もちろん共軌回転弾の箱は、機上に大事に保管されていた。

大陸を出発。成層圏まで一気に上昇して、逆流をついて東へ飛行をつづけ、予定のお

リワシントンへ凱旋がいせんしたのであった。

それから後の話は、むしろ金博士の部屋に於て描写するのがよいであろう。

金博士は、珍らしく新聞を読んでいる。その翌日の夕刊紙だった。

新聞の上段ぶつとおしの特初号活字とくしよごうかつじの白ぬきで伝える大事件の特報……

“ワシントン、一夜のうちに崩壊ほうかいす——白聖館最初に犠牲ぎせいとなる。危機一髪、ル大統領、身を以て遁のがれる。崩壊事件の真相全く不明”

“ワシントン崩壊事件の原因は、不可視怪戦車か。——崩壊は引続き蔓延まんえんちゆう中——軍需工場地帯を南進中”

“被害つひ遂にニューヨーク市に波及はきゆう。高層建築地帯は昨夜のうちに全壊”

“不可視戦車の音を聞くの記——特派決死記者アーノルド手記”

“不可視戦車鎮圧に出動の第五十八戦車兵団全滅す。空軍の爆撃も無力。鎮圧の見込全然なし”

“怪犯人の容疑者たるルス嬢とベラント氏は昨夜私刑しけいさる”

鉛華女が、無線電話のかかって来たのを金博士に伝えたので、博士は新聞を机上きじようへ放りだして、送話器に向った。

「はいはい。金博士じやが。なに、あの件は何度訊きいても変つた返事は出来ぬよ。ルーズベルト君。一体共軌回轉彈の發明は未完成でな、起動法は考え出したが、停止法はまだ考え出さんのじや。じやから処置なしじや。……すぐ考え出せといっても、そうはいかん。今までに一年も考えたんだが、さつぱりよい停止方法がないのじや。当分暴あはれたいだけ回轉彈に暴れさせて置く外ないね。……それは駄目だよ。君んところには自慢の学者のインシュタインがいるじやないか。あの男に相談してみた方が早いよ。なに、彼も匙さじをなげて自殺したと。莫ぼ迦かな奴……とにかくわしに責任はないよ。君の特使が申出たとおりにやつたばかりじや。そんなに文句をいうのなら、これから君がわしのところへやつて来たらいいじやないか。電話には、後あともう出ないよ。では失敬」

金博士は、送受話器のスイッチをぴちんと切ると、髭をふるわせて呵か々か大か笑たいしした。そして独ひとりごと言をいった。

「莫迦な奴らだ。目的地についたとき共軌回轉彈が活動するようにと、時限装置を合わせるぞといつてやつたじやないか。目的地といえば、戦場にきまつとる。あれをわざわざワシントンへ持つて行く莫迦もないもんだ。アメリカ人というやつはどうしてああそそっかしいのだろうか」

それからごくりと咽喉のどを鳴らし、

「それにしても、ルスとベラントという燻製料理の名人を二人も同時に喪うしなったことは、世界の大損失じゃ。そうそう、まだどこかにバイソンの燻製がまだ少し残っていたつけ」

金博士はにやりと笑って立上ると、冷蔵庫の中へ頭を突つっこ込んだ。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第10巻 宇宙戦隊」三一書房

1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1944（昭和19）年9月

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2009年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

共軌回転弾

——金博士シリーズ・11——

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 海野十三

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>